

漱石全集
第九卷

門

全三十五卷 第九回配本

一九五六年八月二日 第一刷發行◎
一九七九年四月五日 第五刷發行

漱石全集 第九卷

定價 八〇〇圓

著 者 夏 目 漱 石
なつ め そう せき

發行者 東京都千代田區一ツ橋二一五―五
綠 川 亨

印刷者 東京都青梅市根ヶ布一―三八五
青 木 勇



發行所

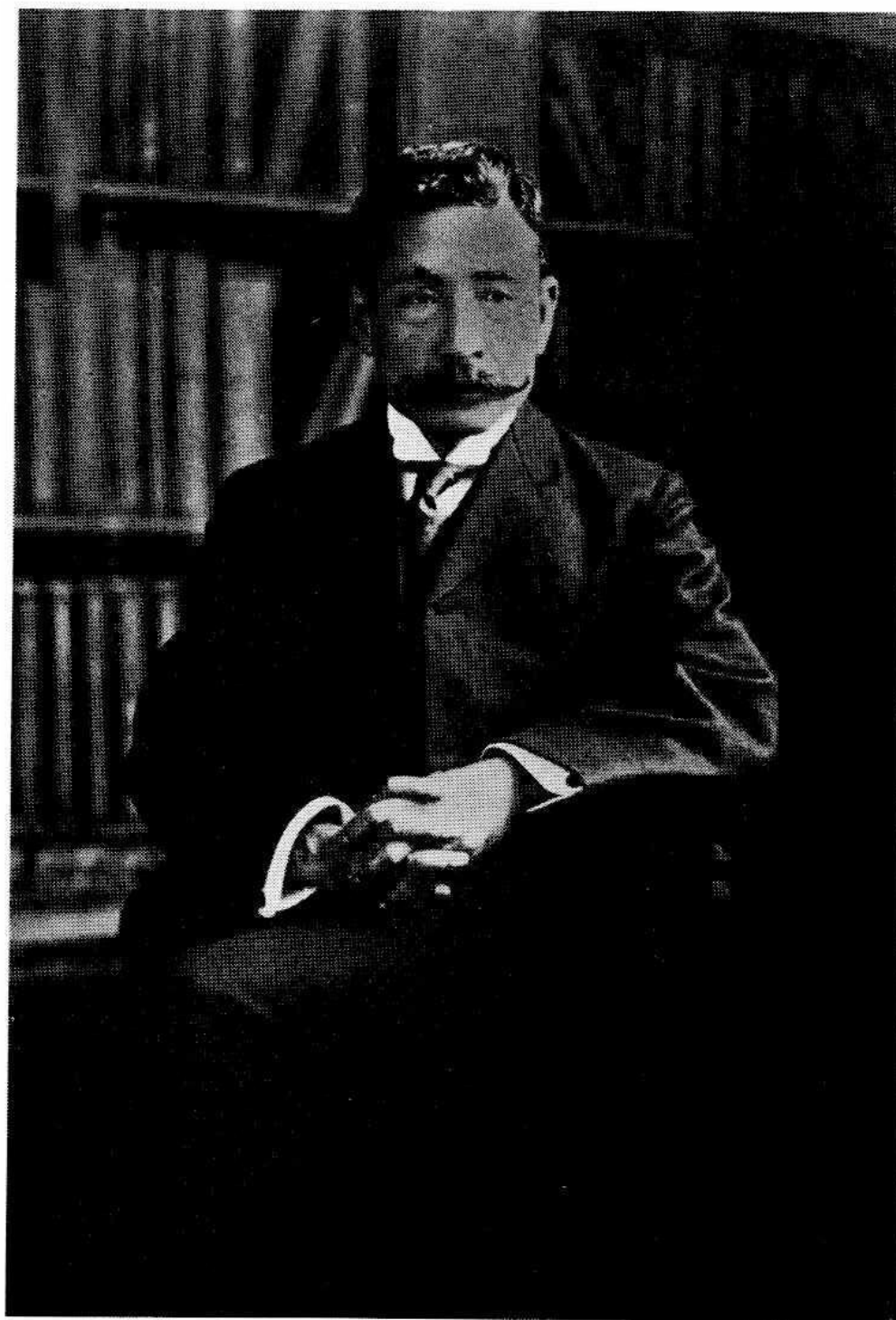
東京都千代田區
一ツ橋二一五―五
株式會社

岩 波 書 店

電話〇三―二五―四二二 振替東京六三六三〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

印刷・精興社 製本・三水舎



明治四十三年四月撮影

門
目
次
注 解
解 說

三 一 三

門

明治四三、三、一一四三、六、二二

一

宗助は先刻から縁側へ坐蒲團を持ち出して、日當りの好きさうな所へ氣樂に胡坐をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。秋日和と名のつく程の上天氣なので、往來を行く人の下駄の響が、靜かな町丈に、朗らかに聞えて来る。肱枕をして軒から上を見上げると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでゐる。其空が自分の寐てゐる縁側の窮屈な寸法に較べて見ると、非常に廣大である。たまの日曜に斯うして緩くり空を見る丈でも大分違ふなど思ひながら、眉を寄せて、ぎら／＼する日を少時見詰めてゐるが、眩しくなつたので、今度はぐるりと寐返

りをして障子の方を向いた。障子の中では細君が裁縫をしてゐる。

「おい、好い天氣だな」と話し掛けた。細君は、

「えい」と云つたなりであつた。宗助も別に話したい譯でもなかつたと見えて、夫なり黙つて仕舞つた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でも爲て入らつしやい」と云つた。然し其時は宗助が唯うんと云ふ生返事を返した丈であつた。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寐てゐる夫の姿を覗いて見た。夫はどう云ふ了見か兩膝を曲げて海老の様に窮屈になつてゐる。さうして兩手を組み合はして、其中へ黒い頭を突つ込んでゐるから、肱に挟まれて顔がちつとも見えない。

「貴方そんな所へ寐ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京の様な、東京でない様な、

現代の女學生に共通な一種の調子を持つてゐる。

宗助は兩肱の中で大きな眼をぱち／＼させながら、

「寐やせん、大丈夫だ」と小聲で答へた。

夫から又靜かになつた。外を通る護謨車（ごもくるま）のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる聲が聞えた。宗助は仕立卸しの紡績織（ぼうせきおり）の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味（あたゝかみ）を、襯衣（しやつ）の下で貪ぼる程味（あぢは）ひながら、表の音を聴くともなく聴いてゐたが、急に思ひ出した様に、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近來の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。

細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたまゝ、ましい笑聲も立てず、

「近江のおほの字ぢやなくつて」と答へた。

「其近江のおほの字が分らないんだ」

細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、數居の外へ長い物指（ものさし）を出して、其先で近の字を縁側へ書いて

見せて、

「斯うでしやう」と云つた限、物指の先を、字の留つた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顔も見ずに、

「矢つ張り左様か」と云つたが、冗談でもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。細君も近の字は丸で氣にならない様子で、

「本當に好い御天氣だわね」と半ば獨り言の様に云ひながら、障子を開けた儘又裁縫（しじやう）を始めた。すると宗助は肱で挟んだ頭を少し擡（もた）げて、

「何うも字と云ふものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「何故」

「何故つて、幾何容易（いくろやさし）い字でも、こりや變だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大變迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ぢつと眺め

てゐると、何だか違つた様な氣がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。――御前そんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「己丈かな」と宗助は頭へ手を當てた。

「貴方何うかして入らつしやるのよ」

「矢つ張り神經衰弱の所爲かも知れない」

「左様よ」と細君は夫の顔を見た。夫は漸く立ち上つた。

針箱と糸屑の上を飛び越す様に跨いで、茶の間の襖を開けると、すぐ座敷である。南が玄關で塞がれてゐるので、突き當りの障子が、日向から急に這入つて來た眸には、うそ寒く映つた。其所を開けると、廂に逼る様な勾配の崖が、縁鼻から聳えてゐるので、朝の内は當つて然るべき筈の日も容易に影を落さない。崖には草が生えてゐる。下からして一側も石で疊んでない

から、何時壊れるか分らない虞があるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないさうで、その爲か家主も長い間昔の儘にして放つてある。尤も元は一面の竹藪だつたとかで、それを切り開く時に根丈は堀り返さず、に土堤の中に埋めて置いたから、地は存外緊つてゐますからねと、町内に二十年も住んでゐる八百屋の爺が勝手口でわざ／＼説明して呉れた事がある。其時宗助はだつて根が残つてゐれば、又竹が生えて藪になりさうなものぢやないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、あゝ切り開かれて見ると、さう甘く行くもんどぢやありませんよ。然し崖丈は大丈夫です。どんな事があつたつて壊えつこはねえんだからと、恰も自分のものを辯護でもする様に力んで歸つて行つた。

崖は秋に入つても別に色づく様子もない。たゞ青い草の匂が窺めて、不揃にもぢや／＼する許である。薄だの蔦だのと云ふ洒落たものに至つては更に見當らな

い。其代り昔の名残りの孟宗が中途に二本、上の方に三本程すつくりと立つてゐる。夫が多少黄に染まつて、幹に日の射するときなどは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味を眺められる様な心持がする。宗助は朝出て四時過に歸る男だから、日の詰まる此頃は、滅多に崖の上を覗く暇を有たなかつた。暗い便所から出て、手水鉢の水を手を受けながら、不圖廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思ひ出した。幹の頂に濃かな葉が集まつて、丸で坊主頭の様に見える。それが秋の日に酔つて重く下を向いて、寂そりと重なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉て、座敷へ歸つて、机の前へ坐つた。座敷とは云ひながら客を通すから左様名づける迄で、實は書齋とか居間とか云ふ方が穩當である。北側に床があるので、申譯の爲に變な軸を掛けて、其前に朱泥の色をした拙な花活が飾つてある。欄間には額も何も

ない。唯眞鍮の折釘丈が二本光つてゐる。其他には硝子戸の張つた書棚が一つある。けれども中には別には是と云つて目立つ程の立派なものも這入つてゐない。

宗助は銀金具の付いた机の抽出を開けて頻に中を検べ出したが、別に何も見付け出さないうちに、はたりと締めて仕舞つた。夫から硯箱の蓋を取つて、手紙を書き始めた。一本書いて封をして、一寸考へたが、

「おい、佐伯のうちは中六番町何番地だつたかね」と襖越に細君に聞いた。

「二十五番地ぢやなくつて」と細君は答へたが、宗助が名宛を書き終る頃になつて、

「手紙ぢや駄目よ、行つて能く話をして來なくつちや」と付け加へた。

「まあ、駄目迄も手紙を一本出して置かう。夫で不可なかつたら出掛けるとするさ」と云ひ切つたが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、夫で好いだらう」と念を押した。

細君は悪いとも云ひ兼ねたと見えて、其上争ひもしなかつた。宗助は郵便を持った儘、座敷から直ぐ玄關に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、是は茶の間の縁傳ひに玄關に出た。

「一寸散歩に行つて来るよ」

「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。

三十分許して格子ががらりと開いたので、御米は又裁縫の手を已めて、縁傳ひに玄關へ出て見ると、歸つたと思ふ宗助の代りに、高等學校の制帽を被つた、弟の小六が這入つて來た。袴の裾が五六寸しか出ない位の長い黒羅紗のマントの釦を外しながら、

「暑い」と云つてゐる。

「だつて餘まりだわ。此御天氣にそんな厚いものを着て出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだらうと思つて」と小六は云譯を半分しながら、嫂の後に跟いて、茶の間へ通つたが、縫ひ掛けてある着物へ眼を着けて、

「相變らず精が出ますね」と云つたなり、長火鉢の前へ胡坐をかいた。嫂は裁縫を隅の方へ押し遣つて置いて、小六の向へ來て、一寸鐵瓶を卸して炭を繼ぎ始めた。

「御茶なら澤山です」と小六が云つた。

「厭？」と女學生流に念を押した御米は、

「ぢや御菓子は」と云つて笑ひかけた。

「有るんですか」と小六が聞いた。

「いゝえ、無いの」と正直に答へたが、思ひ出した様に、「待つて頂戴、有るかも知れないわ」と云ひながら立ち上がる拍子に、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸棚を開けた。小六は御米の後姿の、羽織が帶で高くなつた邊を眺めてゐた。何を探すのだから中々手間が

取れさうなので、

「ぢや御菓子も廢しにしませう。それよりか、今日は兄さんは何うしました」と聞いた。

「兄さんは今一寸」と後向の儘答へて、御米は矢張り戸棚の中を探してゐる。やがてぱたりと戸を締めて、
「駄目よ。何時の間にか兄さんがみんな食べて仕舞つた」と云ひながら、又火鉢の向へ歸つて來た。

「ぢや晩に何か御馳走なさい」

「えゝ爲てよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は「四時、五時、六時」と時間を勘定した。

小六は黙つて嫂の顔を見てゐた。彼は實際嫂の御馳走には餘り興味を持ち得なかつたのである。

「姉さん、兄さんは佐伯へ行つて呉れたんですかね」と聞いた。

「此間から行く行くつて云つてゐる事は云つてゐるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に歸るんでせう。歸ると

草臥れちまつて、御湯に行くのも大儀さうなんですもの。だから、さう責めるのも實際御氣の毒よ」

「そりや兄さんも忙がしいには違なからうけれども、僕もあれが極まらないと氣掛りで落ち付いて勉強も出來ないんだから」と云ひながら、小六は眞鍮の火箸を取つて火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。御米は其動く火箸の先を見てゐた。

「だから先刻手紙を出して置いたのよ」と慰める様に云つた。

「何て」

「そりや私もつい見なかつたの。けれども、屹度あの相談よ。今に兄さんが歸つて來たら聞いて御覽なさい。屹度左様よ」

「もし手紙を出したのなら、其用には違ないでせう」
「えゝ、本當に出したのよ。今兄さんが其手紙を持つて、出しに行つた所なの」

小六はこれ以上辯解の様な慰藉の様な嫂あにやめの言葉に耳を借したくなかつた。散歩に出る閑ひまがあるなら、手紙の代りに自分で足を運んで呉れたらよささうなものだと思ふと餘り好い心持でもなかつた。座敷へ来て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出して、方々頁ページを剝はくつて見てゐた。

二

其所に氣の付かなかつた宗助は、町の角迄来て、切手と「敷島」を同じ店で買つて、郵便丈だけはすぐ出したが、其足で又同じ道を戻るのが何だか不足だつたので、啣くはえ烟草の烟けむを秋の日に揺ゆつかせながら、ぶら／＼歩いてゐるうちに、どこか遠くへ行つて、東京と云ふ所はこんな所だと云ふ印象をはつきり頭の中へ刻み付けて、さうして夫それを今日の日曜みやげの土産みやげに家へ歸かへつて寐ねやうと云ふ氣になつた。彼は年來東京の空氣を吸つて生

きてゐる男であるのみならず、毎日役所の行通ゆきかよひには電車を利用して、賑やかな町を二度づゝは屹度きつと往つたり來たりする習慣になつてゐるのではあるが、身體と頭に樂うれがないので、何時いつでも上の空そらで素通りをする事になつてゐるから、自分が其賑やかな町の中に生きてゐると云ふ自覺は近來頓とんと起つた事がない。尤も平生は忙がしさに追はれて、別段氣にも掛からないが、七日に一返の休日が来て、心がゆつたりと落ち付ける機會に出逢ふと、不斷の生活が急にそわ／＼した上調子うはてうしに見えて来る。必竟ひつぎやう自分は東京の中に住みながら、ついまだ東京といふものを見た事がないんだといふ結論に到着すると、彼は其所に何時いつも妙な物淋しさを感ずるのである。

さう云ふ時には彼は急に思ひ出した様に町へ出る。其上懷に多少餘裕でもあると、是で一つ豪遊さうでもして見様みやうかと考へる事もある。けれども彼の淋さびしみは、彼

を思ひ切つた極端に驅り去る程に、強烈の程度なものでないから、彼が其所迄猛進する前に、それも馬鹿々々しくなつて已めて仕舞ふ。のみならず、斯んな人の常態として、紙入の底が大抵の場合には、輕舉を戒める程度内に膨らんでゐるので、臆効な工夫を凝らすよりも、懷手をして、ぶらりと家へ歸る方が、つい樂になる。だから宗助の淋しみは單なる散歩か觀工場縱覽位な所で、次の日曜迄は何うか斯うか慰藉されるのである。

此日も宗助は兎も角もと思つて電車へ乗つた。所が日曜の好天氣にも拘らず、平常よりは乗客が少ないので例になく乗心地が好かつた。其上乗客がみんな平和な顔をして、どれもこれも悠たりと落付いてゐる様に見えた。宗助は腰を掛けながら、毎朝例刻に先を争つて席を奪ひ合ひながら、丸の内方面へ向ふ自分の運命を顧みた。出勤制限の電車の道伴程殺風景なものはない。

い。革にぶら下がるにしても、天鵝絨に腰を掛けるにしても、人間的な優しい心持の起つた試は未だ嘗てない。自分も夫で澤山だと考へて、器械か何ぞと膝を突き合せ肩を並べたかの如くに、行きたい所迄同席して不意と下りて仕舞ふ丈であつた。前の御婆さんが八つ位になる孫娘の耳の所へ口を付けて何か云つてゐるのを、傍に見てゐた三十恰好の商家の御神さんらしいのが、可愛らしがつて、年を聞いたり名を尋ねたりする所を眺めてゐると、今更ながら別の世界に來た様な心持がした。

頭の上には廣告が一面に枠に嵌めて掛けてあつた。宗助は平生これにさへ氣が付かなかつた。何心なしに一番目のを讀んで見ると、引越は容易に出來ますと云ふ移轉會社の引札であつた。其次には經濟を心得る人は、衛生に注意する人は、火の用心を好むものは、と三行に並べて置いて其後に瓦斯竈を使へと書いて、瓦

斯竈から火の出てる畫迄添へてあつた。三番目には露國文豪トルストイ伯傑作「千古の雪」と云ふのと、パンカラ喜劇小辰大一座と云ふのが、赤地に白で染め抜いてあつた。

宗助は約十分も掛かつて、凡ての廣告を丁寧三返程讀み直した。別に行つて見やうと思ふものも、買つて見たいと思ふものも無かつたが、たゞ是等の廣告が判然と自分の頭に映つて、さうして夫を一々讀み終せた時間のあつた事と、それを悉く理解し得たと云ふ心の餘裕が、宗助には少なからぬ満足を與へた。彼の生活は是程の餘裕にすら誇りを感じる程に、日曜以外の出入りには、落ち付いてゐられないものであつた。

宗助は駿河臺下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝子の中に美しく並べてある洋書に眼が付いた。宗助はしばらく其前に立つて、赤や青や縞や模様の上に、鮮かに叩き込んである金文字を眺めた。表題の意

味は無論解るが、手に取つて、中を檢べて見やうといふ好奇心はちつとも起らなかつた。本屋の前を通ると、屹度中へ這入つて見たくなつたり、中へ這入ると必ず何か欲しくなつたりするのは、宗助から云ふと、既に一昔し前の生活である。たゞ History of Gambling (博奕史) と云ふのが、殊更に美裝して、一番眞中に飾られてあつたので、それが幾分か彼の頭に突飛な新し味を加へた丈であつた。

宗助は微笑しながら、急忙しい通りを向側へ渡つて、今度は時計屋の店を覗き込んだ。金時計だの金鎖が幾つも並べてあるが、是もたゞ美しい色や恰好として、彼の眸に映る丈で、買ひたい了簡を誘致するには至らなかつた。其癖彼は一々絹糸で釣るした價格札を讀んで、品物と見較べて見た。さうして實際金時計の安價なのに驚ろいた。

蝙蝠傘屋の前にも一寸立ち留まつた。西洋小間物を